



20 世紀前半における南モンゴル地域の社会変動に関する研究

19 世紀末、清朝政府は烈強の侵略や国内の反乱で悪化した財政の再建を試み、それまでに禁じていた漢人農民のモンゴル地域への流入を解禁し、「移民実辺」政策を実施した。それにより 20 世紀に入ってから大量の漢人農民がモンゴル地域になだれ込んで牧草地を開墾し、農耕と遊牧という二つの文明の衝突を引き起こした。これが後の中華民国、日本の大陸進出、そして中華人民共和国へ移り行く歴史の流れの中で、特にゴビ砂漠以南のモンゴル地域の社会と政治状況に目まぐるしい変化をもたらした。本プロジェクトでは、清朝末期から 20 世紀半端まで時期を一つのスパンとして考え、その中で南モンゴル地域を舞台に繰り広げられた様々な統治権力による対モンゴル政策、並びに土地をめぐる諸問題の考察を試み、モンゴル人が土地と共に失ったものについて考える。これは、近現代における国際関係の変化、人類が今なお直面する民族間紛争やマイノリティの権利など様々な問題について考える上で極めて重要な視角であろう。

問い合わせ： bainarisu1986@yahoo.co.jp

日時: 2024 年 2 月 18 日(日) 14:00-17:00

場所: 神戸大学鶴甲第 1 キャンパス E411(会議室)

形式対面・事前申し込み不要

1. 研究プロジェクトの説明 アルチャ (阿日查) 代表者
2. 清末期外藩モンゴルにおける教会用地を巡る問題
— オルドス・ウーシン旗におけるスクート会の土地購入によるトラブルを事例に
ハスゴワ (ハス高娃) 担当者
3. 近現代東部内モンゴルにおける蒙地開放及び中国本土式の行政機構設置問題
— ゴルロス前旗を事例として
ホウ レイシュン (包茶春) 担当者
4. 内モンゴル近代史における蒙疆政権の成立
— 多角の視点からみる「聯合政権」
ハク ナルス (白那日蘇) 担当者
5. 内モンゴルの土地改革における階級区分に関する考察
— トウメド地域を中心に
アルチャ (阿日查) 代表者

コメンテーター

萩原守 神戸大学名誉教授・摂南大学特任教授

ボルジギン・ブレンサイン 滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科 教授

橘誠 神戸大学大学院国際文化学研究科 准教授